

中華書局編輯部編『詩詞曲語辭辭典』に見る 唐詩の特徴的な用法について (2)

佐藤 正光^{*1}・高橋 未来^{*2}・有木 大輔^{*3}・西村 諭^{*4}

中国古典学分野

(2016年8月26日受理)

要 旨

本稿は、前年度紀要掲載論文（高橋未来・佐藤正光「中華書局編輯部編『詩詞曲語辭辭典』に見る唐詩の特徴的な用法について」）に続き、唐詩における特殊な用法を分析するものである。唐詩および宋代以後の詩詞曲には、しばしばオーソドックスな意味と異なる特殊な用法（以下、異読と称する）が見られる。それは時代や地域、社会階層によって生み出された俗語、方言などである。これまで日本では訓読によって詩を深く読むことが可能であったが、一方で訓読だけではそのような異読の用法を捉えきれないという問題があった。そこで異読の用法を検討する最初の試みとして、前年度紀要では、異読を多く記載する中華書局編輯部編『詩詞曲語辭辭典』（中華書局、2014）から、唐詩の用例を訳出・検討した。本稿でも同書の用例の訳出を継続して行い、古訓にとらわれずより精確で新たな解釈を追究する。アルファベットによるピンイン表記でAからGまでの用例を抜き出して検討した結果、異読にも多様な用法があることが明らかとなり、また唐詩から宋词へと語りの意味が継承される現象が窺われるのである。

キーワード：唐詩，異読

はじめに

唐詩には、しばしば時代や地域性、階層、文化習慣などにより特殊な意味を持つ語彙が見られる。詩を精確に解釈するためには、そのような特殊語彙（以下、異読と称する）への理解が欠かせないが、日本の伝統的な訓読では、場合によっては、異読の特殊な読みと意味を捉えきれないという悩みがあった。そこで、より精確な解釈と、異読の文学的効果およびその創造性の意義を追究する第一段階として、前年度紀要（高橋未来・佐藤正光「中華書局編輯部編『詩詞曲語辭辭典』に見る唐詩の特徴的な用法について」）において、『詩詞曲語辭辭典』所収の唐詩における異読の用法を抜き出し、アルファベットによるピンイン表記でAからCまで13項の用例を訳出、検討した。その結果、全項目は『新撰字鏡』、『和名類聚抄』、『類聚名義抄』等の主要な古辞書に古訓の無い意味を含むため、新たに訓を付与し、著名な作品でも従来と異なる新たな解釈で捉え直すことが可能となった。今年度より、この研究主題は文部科学省科学研究費助成事業基盤研究C「唐詩における異読の包括的研究」（平成28年～32年度、研究代表者東京学芸大学佐藤正光、研究分担者高橋未来、研究協力者有木大輔、西村諭）として採用された。そこで本稿ではさらなる訳出作業と検討を進め、唐詩および宋代以降の

*1 東京学芸大学 日本語・日本文学研究講座 中国古典学分野 (184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

*2 東京学芸大学、茨城女子短期大学 表現文化学科 (311-0114 那珂市東木倉960-2)

*3 筑波大学附属駒場中・高等学校 (154-0001 世田谷区池尻4-7-1)

*4 東京学芸大学附属国際中等教育学校 (178-0063 練馬区東大泉5-22-1)

詩詞曲における異読の可能性を追究することとする。

1. 衝 chōng

おかす、向かうの意。杜甫¹「夜歸」(『全唐詩』卷222)「夜來歸來衝虎過，山黑家中已眠臥(夜來帰り来たりて虎を衝して過ぎ，山黒くして家中已に眠り臥す)」，また「重題鄭氏東亭(重ねて鄭氏の東亭に題す)」(『全唐詩』卷224)「紫鱗衝岸躍，蒼隼護巢歸(紫鱗 岸を衝して躍り，蒼隼 巢を護らんとして帰る)」，また「小至」(『全唐詩』卷231)「岸容待臘將舒柳，山意衝寒欲放梅(岸容 臘を待ちて將に柳を舒ばさんとし，山意 寒を衝して梅を放たんと欲す)」，また「暮秋將歸秦留別湖南幕府親友(暮秋將に秦に帰らんとして湖南の幕府の親友に留別す)」(『全唐詩』卷233)「北歸衝雨雪，誰憫旧貂裘(北歸 雪を雨らすを衝す，誰か旧き貂裘を憫れまん)」，李白⁴「古風五十九首」其十六(『全唐詩』卷161)「精光射天地，雷騰不可衝(精光天地を射，雷騰りて衝すべからず)」，韓愈⁵「雉帶箭」(『全唐詩』卷338)「衝人決起百余尺，紅翎白鏃隨傾斜(人を衝わせ決起すること百余尺，紅翎白鏃傾斜に随う)」，白居易⁶「酬韓侍郎張博士雨後遊曲江見寄(韓侍郎，張博士の雨後に曲江に遊びて寄せらるるに酬ゆ)」(『全唐詩』卷442)「何必更隨鞍馬隊，衝泥踏雨曲江頭(何ぞ必ずしも更に随わん鞍馬隊，泥を衝し雨を踏む曲江頭)」，元稹⁷「嶺南道中⁸」「愁衝毒霧逢蛇草，畏落沙虫避燕泥(毒霧を衝さんことを愁いて蛇草に逢い，沙虫の落ちんことを畏れて燕泥を避く)」。(西村)

2. 伝 chuán

唐詩中の「伝」字は、時として「聞」と同じ意味で使われる。杜甫「聞高常侍亡(高常侍の亡するを聞く)」(『全唐詩』卷229)「婦朝不相見，蜀使忽伝亡(婦朝相見ず，蜀使忽として亡するを伝く)」，また「承聞故房相公靈輓自閬州起殯歸葬東都有作⁹(故房相公の靈輓，閬州より殯を起こして東都に歸葬せらるるを承聞して作る有り)二首」其二(『全唐詩』卷229)「丹旌飛飛日，初伝發閬州(丹旌飛飛たる日，初めて閬州を發するを伝く)」，また「峡口¹⁰」(『全唐詩』卷230)「雨声伝兩夜，寒事颯高秋(雨声伝くこと兩夜，寒事 高秋に颯たり)」，また「李司馬橋了承高使君自成都回(李司馬の橋了わり，高使君成都より回ると承る)」(『全唐詩』卷226)「已伝童子騎青竹，綵擬橋東待使君(已に伝く 童子青竹に騎り，綵べて擬す 橋東に使君を待つを)」，そのうち一つ目と二つ目の例にあげた句の「伝」とは、とりもなおさず詩題にみえる「聞」のことである。三つ目の例は「兩夜雨声を聞く」ということであり、もし「伝來」または「伝遞」の意味で解釈すると、まったく通じなくなる。四つ目の例も「すでに耳にした」ということであり、「すでに伝えた」ということではない。さらに他の詩人の詩句でこれを明らかにすれば、陳子昂¹¹「酬田逸人遊巖見尋不遇題隱居里壁(田逸人の巖に遊びて尋ねらるるも遇わず，隱居里の壁に題するに酬ゆ)」(『全唐詩』卷102)「游人獻書去，薄暮返靈台。伝道尋仙友，青囊売卜來(游人書を獻じて去り，薄暮靈台に返る。伝くならく仙友を尋ぬれば，青囊もて売卜せんとして來たる)」とあり、三・四句の大意は、どうやら田逸人が来ていたらしい、という意味である。李白「古風五十九首」其五(『全唐詩』卷161)「我來會真人，長跪問寶訣…銘骨伝其語，竦身已電滅(我來たりて真人に会い，長跪して寶訣を問う…骨に銘じて其の語を伝くに，身を竦しみて已に電滅す)」，高適¹²「自淇涉黃河途中作(淇より黃河を渉る途中の作)十三首」其十一(『全唐詩』卷212)「我行倦風湍，輟棹將問津。空伝歌瓠子，感慨獨愁人(我が行 風湍に倦み，棹を輟めて將に津を問わんとす。空しく瓠子を歌うを伝き，感慨独り人を愁えしむるのみ)」，また「同顔六少府旅宦秋中之作(顔六少府と同一に旅宦す秋中之作)」(『全唐詩』卷214)「伝君昨夜悵然悲，獨坐新齋木落時(伝く君昨夜悵然として悲しむを，独り新齋に坐す木落つる時に)」，また「辟陽城」(『全唐詩』卷214)「伝道漢天子，而封審食其(伝くならく漢天子，審食其を封ずと)」，岑參¹³「還高冠潭口留別舍弟(高冠潭口に還りて舍弟に留別す)」(『全唐詩』卷200)「遥伝杜陵叟，怪我還山遲(遙かに伝く杜陵の叟，私の山に還ることの遅きを怪しむを)。上述の「伝」はいずれも「伝説(言い伝える)」の意味で解釈することはできない。特に三つ目の例の「瓠子」は「瓠子之歌」を指している。漢の武帝の時，黃河が瓠子(地名)で決壊し，漢の武帝が自ら出向いてこれを塞ぎ，「瓠子之歌」を作った。高適の言おうとしているところは，漢の時代に瓠子で塞いだ故事を空しく聞くだけで，今では河を治める人が誰もいないために，感慨がきわめて深い，ということである。この句は明らかに「伝」を「伝説」の意味とし

て解釈することはできない。（西村）

3. 摧藏 cuī cáng

①聯綿詞。おさえつけられるの意。成公綏¹⁴「嘯賦」（『文選¹⁵』卷18）「和楽怡懌，悲傷推蔵（和楽怡懌し，悲傷摧蔵す）」，李善注「自抑挫之貌（自ら抑挫するの貌）」，李白「贈劉都使（劉都使に贈る）」（『全唐詩』卷170）「所求竟無緒，裘馬欲摧蔵（求むる所は竟に緒無く，裘馬摧蔵せんと欲す）」，柳宗元¹⁶「籠鷹詞」（『全唐詩』卷353）「炎風溽暑忽然至，羽翼脱落自摧蔵（炎風溽暑忽然として至り，羽翼脱落して自ら摧蔵す）」。

②聯綿詞。悲傷の意。劉琨¹⁷「扶風歌」（『文選』卷28）「慷慨窮林中，抱膝独摧蔵（慷慨林中に窮まり，膝を抱えて独り摧蔵す）」，陳子昂「酬李參軍崇嗣旅館見贈（李參軍崇嗣の旅館にて贈らるるに酬ゆ）」（『全唐詩』卷83）「摧蔵多古意，歷覽備艱辛（摧蔵 古意多く，歷覽 艱辛を備む）」，李白「留別曹南群官之江南（曹南群官の江南に之くに留別す）」（『全唐詩』卷174）「仙宮兩無從，人間久摧蔵（仙宮兩つながら従う無く，人間久しく摧蔵す）」。

・「摧残」cuī cán “摧蔵”に同じ。李白「贈友人（友人に贈る）三首」其二（『全唐詩』卷171）「荊卿一去後，壯士多摧残（荊卿一たび去りて後，壯士多く摧残す）」，杜甫「杜鵑行」（『全唐詩』卷219）「爾豈摧残始發憤，羞帶羽翮傷形愚（爾豈に摧残せられて始めて發憤し，羽翮を帯ぶるを羞じ形の愚なるを傷むか）」，これは“おさえつけられる”の意味である。李白「贈友人¹⁸」「卷舒固在我，何事空摧残（卷舒固より我に在り，何事ぞ空しく摧残す）」，これは“悲傷”の意味である。（西村）

4. 大底 dà dǐ

①総じて。上文をまとめる。白居易「閑臥有所思（閑臥して思う所有り）二首」（『全唐詩』卷455）「蟲全性命緣無毒，木尽天年為不才。大底¹⁹吉凶多自致，李斯一去二疏回（蟲の性命を全うするは毒無きに縁り，木の天年を尽くすは才あらざるが為なり²⁰。大底 吉凶 自ら致すこと多し，李斯一たび去りて 二疏²¹回る）」，王禹偁²²「淳化二年八月晦日夜夢于上前賦詩既寤唯省一句云九日山州見菊花間一日有商於貳車之命實以十月三日到郡重陽已過殘菊尚多意夢已徵矣今忽然一歲又逼登高追統前詩因成四韻（淳化二年八月晦日夜，上の前に詩を賦するを夢み，既に寤めて唯だ一句を省みて云う，九日山州に菊花を見ると。一日を問て商於の貳車の命有り，實に十月三日を以て郡に到る。重陽已に過ぐるも殘菊尚お多く，意えらく夢は已に徵ありと，今忽然として一歲なり，又た登高逼り，前詩に追統し因りて四韻成る）」（『全宋詩²³』卷65）「商于鄒魯雖迢遞，大底携家即是家（商は鄒魯より迢遞たりと雖も，大底 家を携うれば即ち是れ家なり）」は上に挙げた白居易の詩に同じ。「大抵」の項を見よ。

②「大抵」に同じ，おおむね。白居易「醉後走筆酬劉五主簿長句之贈兼簡張大賈二十四先輩昆季（醉後，筆を走らせて劉五主簿の長句の贈に酬い，兼ねて張大，賈二十四先輩昆季に簡す）」（『全唐詩』卷435）「大底浮榮何足道，幾度相逢即身老（大底 浮榮 何ぞ道うに足らん，幾度か相い逢い 即ち身は老ゆ）」，元稹「送劉太白（劉太白を送る）」（『全唐詩』卷411）「洛陽大底居人少，從善坊西最寂寥（洛陽 大底 居人少なく，從善坊の西 最も寂寥たり）」，劉言史²⁴「誦故友于君集（故友于君の集を読む）」（『全唐詩』卷468）「大底從頭総是悲，就中偏愴『筑城詞』（大底 從頭 総べて是れ悲し，就中 偏に愴む『筑城詞』）」，秦韜玉²⁵「問古（古を問う）」（『全唐詩』卷670）「大底榮枯各自行，兼疑陰鷲也難明（大底 榮枯各おの自ら行き，兼ねて陰鷲²⁶を疑うも也た明らかにし難し）」，羅隱²⁷「聽琵琶（琵琶を聴く）」（『全唐詩』卷662）「大底曲中皆有恨，滿樓人自不知君（大底 曲中皆な恨み有るも，樓に満つる人 自ら君を知らず）」。案ずるに『文選』卷41司馬子長²⁸「報任少卿書（任少卿に報ずる書）」「詩三百篇，大底賢聖²⁹發憤之所為作也（詩三百篇，大底賢聖の發憤して為作る所なり）」，（李）善注「『爾雅』曰「底，致也」（『爾雅』に曰く「底は，致なり」と）」，向注「底，致也（底は，致なり）」，これによれば，「大底」は「大致」の意。

・「大抵」 dà dī 総じて。上文をまとめる。白居易「種桃杏（桃杏を種う）」（『全唐詩』卷441）「無論海角与天涯，大抵心安即是家（論ずる無かれ海角と天涯と，大抵心安んずれば即ち是れ家なり）」。「大抵」の前に二つの事物や，二種の状況を列挙し，「大抵」はそれをまとめる。朱淑真³⁰「送人赴試礼部（人の礼部に試するに赴くを送る）」（『全宋詩』卷1583）「賈生少達終何遇，馬援才高老更堅，大抵功名無早晚，平津今見起蕃川（賈生^{わか}少くして達するも 終に何にか遇う，馬援 才高く 老いて更^{ますます}堅なり，大抵 功名に早晚無く，平津の今蕃川より起こるを見る）」，末句は漢の公孫弘をいう。弘は蕃川の人で，平津侯に封ぜられた。「大抵」の用法は上に同じ。劉敏中³¹「滿江紅」（『全金元詞³²』）「大抵男兒忠孝耳，此身如葉心如鉄（大抵 男兒 忠孝あるのみ，此の身は葉の如きも 心は鉄の如し）」，『永樂大典戲文三種³³』張協狀元・一「大凡情性不拘，夢幻非実，大抵死生有命，富貴在天（なべてこだわらない性だし，夢まぼろしは本当じゃない，総じて生死には定めがあるし，富貴も天が決めるもの）」，『董解元西廂記³⁴』卷五「雖云禍福無門，大抵生死有³⁵命（禍福には門がない」というけれど，「生死は天命に由る」もの）」。「大抵」のこの用法は散文にも見える。歐陽修³⁶「与高司諫書（高司諫に与うる書）」（『歐陽文忠公集³⁷』卷67）「是則足下以希文為賢，亦不免責，以為不賢，亦不免責。大抵罪在默默爾（是れ則ち足下希文を以て賢と為すも，亦た責を免れず，以て不賢と為すも，亦た以て責を免れず。大抵 罪は默默たるに在るのみ）」。また「大底」の項を見よ。（高橋）

5. 帶 dài

①動詞，照らす，照らし出すの意。通常の「取りまく，まとう」，「つなぐ」の意とは異なる。陰鏗³⁸「渡青草湖（青草湖を渡る）」（『先秦漢魏晉南北朝詩³⁹』陳詩卷1）「帶天澄迴碧，映日動浮光（天は帶す 迴碧の澄むを，日は映ず 浮光の動くを）」，「帶」と「映」の字は互文で，「帶天」は即ち「映天」である。李白「涇溪南藍山下有落星潭可以卜築余泊舟石上寄何判官昌浩（涇溪の南，藍山の下に落星潭有り，以て卜築すべし，余は舟を石上に泊し，何判官昌浩に寄す）」（『全唐詩』卷173）「沙帶秋月明，水搖寒山碧（沙は帶す 秋月の明らかなるを，水は揺らす 寒山の碧なるを）」，杜甫「夜宴左氏莊（夜，左氏の莊に宴す）」（『全唐詩』卷224）「暗水流花徑，春星帶草堂（暗水 花徑に流れ，春星 草堂を帶す）」，劉長卿⁴⁰「至德三年春正月時謬蒙差撰海塩令聞王師収二京因書事寄上浙西節度李侍郎中丞行營五十韻（至德三年春正月，時に謬りて海塩令を差撰するを蒙る，王師が二京を収むるを聞き，因りて事を書して浙西節度李侍郎中丞の行營に寄せ上る五十韻）」（『全唐詩』卷150）「吳山依重鎮，江月帶行營（吳山 重鎮に依り，江月 行營を帶す）」，意は上の例に同じ。元稹「遭風（風に遭う）二十韻」（『全唐詩』卷414）「暝色已籠秋竹樹，夕陽猶帶旧樓台（暝色 已に籠む秋竹樹，夕陽 猶お帶す旧樓台）」，「帶」と「籠」は対応する。薛據⁴¹「題丹陽陶司馬廡壁（丹陽の陶司馬の廡壁に題す）」（『全唐詩』253）「門帶山光晚，城臨江水寒（門は帶す 山光の晩，城は臨む 江水の寒きに）」，秦系⁴²「晚秋拾遺朱放訪山居（晚秋に拾遺の朱放の山居を訪ぬ）」（『全唐詩』260）「墜栗添新味，寒花帶老顏（墜栗 新味を添え，寒花 老顏を帶す）」，侯寘⁴³「鳳凰台上憶吹簫（鳳凰台上に吹簫を憶う）・再用韻詠梅（再び用韻して梅を詠ず）」（『全宋詞⁴⁴』）「空教映滄帶月，供游客無情，折滿雕鞍（空は溪を映じて月を帶せしめ，游客に供するも情無く，滿雕の鞍を折る）」，清・朱彝尊・汪森『詞綜⁴⁵』卷33王燾⁴⁶「台城路」「長天帶水，正日出三竿，客船猶艤。（長天 水を帶し，正に日は三竿⁴⁷を出で，客船 猶お艤す）」，意味はともに同じ。按ずるに王羲之⁴⁸「蘭亭集序」（明・張溥『漢魏六朝百三名家集⁴⁹』）「復有清流激湍，映帶左右（復た清流激湍有り，左右に映帶す）」は「映」と「帶」の二字を連用し，「帶」はすなわち「映」である。ここでは水と光がきらめいて映ることをいい，決してまとわりつくの意ではない。

②覆うの意。沈約⁵⁰「宿東園（東園に宿る）」（『先秦漢魏晉南北朝詩』梁詩卷6）「夕陰帶層阜，長煙引輕素（夕陰 層阜を帯い，長煙 輕素を引く）」，これは覆うの意。暮色が少しずつ峰を覆っていくとの意。劉長卿「送代州李使君兼寄題国清寺（代州の李使君を送り，兼ねて国清寺に寄題す）」（『全唐詩』卷151）「晴江洲渚帶青⁵¹草，古寺杉松深暮猿（晴江 洲渚 青草に帶われ，古寺 杉松 暮猿深し）」，「帶」はまた受け身を表し，洲渚が青草で覆われることをいう。皇甫冉⁵²「和樊潤州秋日登城樓（樊潤州の秋日城樓に登るに和す）」（『全唐詩』卷249）「露冕臨平楚，寒城帶早霜（露冕 平楚に臨み，寒城 早霜に帶わる）」，用法は上に同じ。羊士諤⁵³「暮秋言懷（暮秋に懷いを言う）」（『全唐詩』卷332）「城隅凝彩⁵⁴画，紅樹帶青山（城隅 彩画を凝

らし、紅樹 青山をおほ帶う)], 黎逢⁵⁵「小苑春望宮池柳色（小苑にて春に宮池の柳色を望む）」(『全唐詩』卷288)「色承陽氣暖，陰帶御溝清（色は承く 陽氣の暖かきを，陰はおほ帶う 御溝の清きを)」, 司空圖⁵⁶「即事九首」其一(『全唐詩』卷632)「陂痕侵牧馬，雲影帶耕人（陂痕 牧馬を侵し，雲影 耕人をおほ帶う)」, 仲殊⁵⁷「南歌子」(『全宋詞』)「十里青山遠，潮平路帶沙（十里 青山遠く，潮平らぎて 路は沙におほ帶わる)」。(高橋)

6. 但知 dàn zhī

ただ。蔡礼鴻『敦煌變文字義通釈⁵⁸』1981年新版381頁「知・之」の条に「『但知』には「ただ〜だけ」の意味があり、「〜さえすれば」の意味もあり，文により異なる。「知」も意味を持たない助詞である」と記す。白居易「別種東坡花樹兩絶（東坡に種えし花樹に別る兩絶）」(『全唐詩』卷441)「花林好住莫憔悴⁵⁹，春至但知依旧春（花林 好住して憔悴する莫く，春至らばただ但知旧に依りて春なり)」, これは「さえすれば」の意。清・王士禛『池北偶談⁶⁰』卷13「唐詩字音」に引く徐鉉『騎省集』「莫折紅芳樹，但知尽意看（折る莫かれ紅芳樹，ただ但知意を尽くして看るのみ)」, 自注に「但は平声」という。「但知」と意はまた同じ。趙善扛⁶¹「感皇恩（皇恩に感ず）」(『花庵詞選⁶²』)「拋他縁分，且憑隨時消遣。但知逢酒飲，逢花看（他の縁分にしぼらし、且く時に隨いて消遣するに憑る。ただ但知逢いては酒を飲み，逢いては花を看るのみ)」, 白居易「代春贈（代わりて春に贈る）」(『全唐詩』卷439)「山吐晴嵐水放光，辛夷花白柳梢黄。但知莫作江西意，風景何曾異帝郷（山は晴嵐を吐きて水は光を放ち，辛夷花は白くして柳梢は黄なり。ただ但知江西の意を作す莫くんば，風景 何ぞ曾て帝郷に異なる)」, これは「〜しさえすれば」の意味。晁端礼⁶³「雨中花⁶⁴」(『全宋詞』)「假使釵分金股，休論并引銀瓶，但知記取，此心常在，好事須成（假使 釵の分かちて金の股となるも，論ずるを休めよ井の銀瓶⁶⁵を引くを，ただ但知記取して，此の心常に在らば，好事須く成すべし)」, 張元幹⁶⁶「蝶恋花」(『全宋詞』)「不会參禪并學道，但知心下無煩惱（參禪して并せて道を學ぶに会わざるも，ただ但知心下に煩惱無からん)」, 王以寧⁶⁷「臨江仙」(『全宋詞』)「飲酒但知尋夏季，不須遠慕安期（酒を飲みてただ但知夏季を尋ね，遠く安期⁶⁸を慕うをもち須いず)」。「但」の項を見よ。

・「但」 dàn ただ〜だけの意。毛滂⁶⁹「八節長歡・登高詞」(『全宋詞』)「君但飲，莫覷他，落日蕪城（君ただ但飲み，彼をうかがう莫かれ，日は蕪城に落つ)」, 晁補之⁷⁰「驀山溪」(『全宋詞』)「何須説此，只但飲陶陶，燈光底百花春，自是仙家地（何ぞ須く此を説くべけんや，ただ但飲むこと陶陶たるのみ，燈光の底は百花の春，是れ自り仙家の地なり)」, 朱敦儒⁷¹「憶帝京（帝京を憶う）」(『全宋詞』)「爾但莫，多愁早老。爾但且，不分不曉（爾但だ莫として，愁い多く早に老ゆるのみ。爾但だ且く，分たず曉らざるのみ)」, 元・無名氏『玉清菴錯送鴛鴦被雜劇⁷²』第四折「妹子有話，但説不妨（妹よ，話があるならただ話せ，邪魔などしない)」。「但知」の項を見よ。(高橋)

7. 淡 dàn

退屈，おもしろくないの意。蘇軾⁷³「游廬山次韻章伝道（廬山に遊びて章伝道に次韻す）」(『全宋詩』卷796)「莫笑吟詩淡生活，当令阿買為君書（笑う莫かれ詩を吟ずるも淡として生活するを，当に阿買⁷⁴をして君が為に書せしめん)」, 陳与義⁷⁵「諸公和淵明止酒詩同賦⁷⁶（諸公 淵明の酒を止むの詩に和し，同に賦す)」(『全宋詩』卷1735)「不如淡生活，吟詩北窗里（如かず淡として生活し，詩を北窗里に吟ずるに)」, 「淡生活」とは退屈な生活をいう。劉克莊⁷⁷「黃巖山」(『全宋詩』卷3033)「早知人世淡，來往退居寮（早に知る 人世淡なるを，來往す 退居⁷⁸の寮)」, 楊万里⁷⁹「新晴讀樊川詩（新たに晴れて樊川の詩を読む)」(『全宋詩』卷2294)「不是樊川珠玉句，日長淡殺箇衰翁（是れ 樊川珠玉の句にあらざれば，日長くして 箇の衰翁を淡殺せん)」, 非常につまらないことをいう。劉克莊「沁園春・詠梅⁸⁰（梅を詠ず）」(『全宋詞』)「寧淡殺，不敢憑羌笛，告訴淒涼（寧ら淡殺するも，敢えて羌笛に憑り，淒涼たるを告訴せず)」, また「水龍吟」(『全宋詞』)「製箇淡詞，呷些薄酒，野花簪帽（箇の淡詞を製り，些かの薄酒を呷み，野花を帽に簪す)」, これはおもしろくないとの意。元・楊朝英『朝夜新声太平樂府⁸¹』二〔張〕小山の小令「水仙子・帰興」淡文章不到紫薇郎，小根脚難登白玉堂（淡なる文章は紫薇郎に到らず，小なる根脚⁸²は白玉堂⁸³に登り難し)」, 元・無名氏『梨園按

試楽府新声⁸⁴』下・馬致遠の小令「四块玉・嘆世」[「尽場兒喫悶酒，即席間發淡席，倒大來閑快話（結局⁸⁵憂いて酒を飲み，その場でつまらぬ芝居を演じ，ああかえって楽しいものだ）」]，「發科⁸⁶」とは「妝腔」のこと。元・佚名『漢鍾離度脱藍采和⁸⁷』第四折「這廝淡則淡，到（倒）長命百歲（こいつはつまらないことはつまらないが，かえって百まで長生きするよ）」]，生活は退屈だが長生きすることをいう。元・王擘『桃花女破法嫁周公雜劇⁸⁸』楔子「只好我家主人周公，開着卦鋪……昨日算我隔壁石婆婆的兒子石留住該死，道是不利市。到今蚤日將晌午，方才着我開鋪面……爾道好淡麼！（主人の周さんを笑っているだけだよ，占いの店を開いてさ，……昨日は隣の石ばあさんの息子石留住が死ぬと占った，運氣が悪いことを言うもんだから。今日も早くから昼になって，やっと私も店を出せたんだ……なんてつまらないことを言うんだい）」]，好淡はとても退屈またはとてもつまらないことをいう。

・「淡屑」dàn diào のしり言葉，つまらないの意。元・賈仲明『蕭淑蘭情寄菩薩蠻雜劇⁸⁹』第一折「梅香云「姐姐，這秀才好淡屑麼！（梅香がいう「お嬢さま，この秀才さまはなんてつまらないのしょう！）」」。(高橋)

8. 淡泞 dàn zhù

①草花と装飾が素朴で地味なこと，あっさりして上品，または趣があり優美なことにたとえる。柳永⁹⁰「木蘭花・杏花」(『全宋詞』)「天然淡泞⁹¹好精神，洗尽嚴妝方見媚（天然淡泞にして精神^{よろ}好しく，嚴妝を洗尽して^{はじ}めて媚を見わす）」]，嚴妝はきちんと装いをするの意。王安石⁹²「西江月・紅梅」(『全宋詞』)「梅好惟嫌淡泞⁹³，天教薄与胭脂（梅好しくも惟だ淡泞たるを嫌わば，天教は薄く胭脂を与う）」]，晁補之「鳳凰台上憶吹簫（鳳凰台上に吹簫を憶う）・自金郷之濟至羊山迎次膺（金郷自り濟^ゆ之くに羊山に至りて次膺を迎う）」(『全宋詞』)「又正是，梅初淡泞⁹⁴，禽未綿蛮（又た正に是れ，梅は初めて淡泞たるも，禽は未だ綿蛮⁹⁵ならず）」]，毛滂「玉樓春・紅梅」(『全宋詞』)「当日嶺頭相見處，玉骨氷肌元淡泞⁹⁶（日に当たりて嶺頭 相い見る處，玉骨 氷肌⁹⁷元と淡泞たり）」]，史浩⁹⁸「如夢令・飲婦人酒（婦人の酒を飲む）」(『全宋詞』)「紅杏白梨肌理，時樣新妝淡泞（紅杏 白梨 肌理⁹⁹，時樣¹⁰⁰新たに淡泞を妝う）」]，辛棄疾¹⁰¹「念奴嬌・贈妓善作墨梅（妓の善く墨梅を作るに贈る）」(『全宋詞』)「淡泞¹⁰²輕盈，誰付与，弄粉調朱絳¹⁰³手（淡泞輕盈¹⁰⁴にして，誰か付与せん，粉を弄し朱を調うる絳手）」]。

②景物の色が淡いこと，ほんやりしていることにたとえる。蘇舜欽¹⁰⁵「水調歌頭・滄浪亭」(『全宋詞』)「瀟洒太湖岸，淡泞洞庭山（瀟洒たり太湖の岸，淡泞たり洞庭の山）」]，杜安世¹⁰⁶「漁家傲」(『全宋詞』)「疏雨才収淡泞天。微雲綻處月嬋娟（疏雨 ^{わず}かに収む 淡泞たる天。微雲 ^{ほころ}ぶ處 月は嬋娟¹⁰⁷たり）」]。(高橋)

9. 淡注 dàn zhù

うっすらとつけた，または淡い色。宋词によく用いられる。張孝祥¹⁰⁸「臨江仙」(『全宋詞』)「翠葉銀絲簪末利，櫻桃淡¹⁰⁹注香唇（翠葉 銀絲^{すゝと}のごとく簪末利く，櫻桃 淡注たるがごとき香唇）」]，趙長卿¹¹¹「一叢花・杏花」(『全宋詞』)「胭脂淡注宮妝雅，似文君，猶帶春醒¹¹²（胭脂淡注として 宮妝雅やかなり，文君¹¹³の似く，猶お春を帯びて醒むるがごとし）」]，李之儀¹¹⁴「丑奴兒・謝人寄蠟梅（人の蠟梅を寄するに謝す）」(『全宋詞』)「嫩黃染就蜂鬚巧，香壓團枝。淡注仙衣。方士臨門未起時（嫩黃¹¹⁵染め就きて 蜂鬚¹¹⁶巧みに，香りは團枝を圧す。淡注たる仙衣。方士 門に臨むも未だ起時ならず）」]。

・「淺注」qiǎn zhù 意は「淡注」に同じ。辛棄疾「鷓鴣天」(『全宋詞』)「玉人好把新妝樣，淡画眉兒淺注脣（玉人 把るを好む新妝の樣，淡く画く 眉兒 淺注の脣）」]。

・「輕注」qīng zhù 意は「淡注」に同じ。李煜¹¹⁷「一斛珠・曉妝初過（曉妝初めて^よ過ぎる）」(『全唐五代詞¹¹⁸』)「曉妝初過，沈檀輕注些兒箇（曉妝 初めて過ぎり，沈檀輕注たる些兒箇）」]，辛棄疾「眼兒媚・妓」(『全宋詞』)

「淡妝嬌面，輕注朱脣，一朵梅花（淡妝たる嬌面，輕注たる朱脣，一朵の梅花）」。

・「深注」shēn zhù 色が濃くついている。王之道¹¹⁹「浣溪沙・和張文伯海棠（張文伯の海棠に和す）」（『全宋詞』）「過雨花容雜笑啼。淡妝深注半開時（過雨の花容 笑うと啼くとを雜う。淡妝 深注 半ば開く時）」，趙師俠¹²⁰「朝中措」（『全宋詞』）「鉛華淡薄，輕勻桃臉，深注桜脣（鉛華¹²¹は淡薄にして，輕勻たる桃臉，深注たる桜脣）」。（高橋）

10. 澹泞 dàn zhù

水が清くて深いとの意。宋・丁度等『集韻¹²²』語韻「泞，澄也。丈呂切（泞，澄なり。丈呂の切）」，木華¹²³「海賦」（『文選』卷12）「決滌澹泞，騰傾¹²⁴赴勢（決滌¹²⁵澹泞として，騰傾勢に赴く¹²⁶）」，李善注「澹泞，澄深也（澹泞は，澄深なり）」。白居易「送客回晚興（客を送りて晚興に回る）」（『全唐詩』卷434）「參差亂山出，澹泞平江淨（參差として 亂山 出で，澹泞として 平江 淨し）」，詩中に用いる「澹泞」の意味は木華「海賦」の「澹泞」に同じ。呉師孟¹²⁷「蠟梅香」（『全宋詞』）「国艶天葩，真澹泞¹²⁸，雪肌清瘦（国艶なる天葩¹²⁹，真に澹泞として，雪肌清瘦たり）」，張元幹「豆葉黃・唐腔也為伯南賦早梅復和韻（唐腔なり，伯南の為に早梅を賦し，復た和韻す）」（『全宋詞』）「水溪疏影竹辺香¹³⁰。翠袖天寒炯暮雲。雪里精神澹泞人（水溪 疏影竹辺に香る。翠袖 天寒くして 暮雲炯らかなり。雪里 精神 澹泞たる人）」，また「天仙子」（『全宋詞』）「樓外輕陰春澹泞。數点杏梢寒食雨（樓外 輕陰¹³¹の春澹泞たり。數点¹³²の杏梢 寒食の雨）」。（高橋）

11. 当年 dāngnián

少年あるいは壮年のこと。李白「相逢行」（『全唐詩』卷20）「当年失行樂，老去徒傷悲（当年 行樂を失い，老い去りて徒に傷悲す）」は「老去」と対をなすことから，少壯の意。元稹「夢游春七十韻」（『全唐詩』卷422）「当年二紀初，嘉節三星度（当年 二紀の初め，嘉節 三星度る）」は「嘉節」と対をなすことから，少年の意。令狐楚¹³³「少年行四首」其三（『全唐詩』卷24）「当年称意須行樂¹³⁴，不到天明未肯休（当年 意に称いて須く行樂すべし，天明到らざれば 未だ肯えて休まず）」は少年の行樂をなすの意。李商隱¹³⁵「送千牛李將軍赴闕五十韻（千牛の李將軍の闕に赴くを送る五十韻）」（馮浩『玉谿生詩集箋注¹³⁶』卷1）「照席瓊枝秀，当年紫綬榮（照席¹³⁷ 瓊枝¹³⁸ 秀いで，当年 紫綬榮ゆ）」，馮浩注「『呂氏春秋』，「士有当年而不耕者（士に当年にして耕さざる者有り）」，高誘の訓解「当其丁壯之年（其の丁壯の年に当たる）」。思うにこれは壮年に当たるの意，また壮年の意である。陳師道¹³⁹「寄提刑李学士（提刑の李学士に寄す）」（『全宋詩』卷1116）「上冢過家真樂事，平時持節貴当年（上冢¹⁴⁰家に過ぎる¹⁴¹は真に樂事，平時 節を持するは 当年を貴ぶ）」，また「和顔生同游南山（顔生の同に南山に遊ぶに和す）」（『全宋詩』卷1117）「当年¹⁴²此日仍為客，病目今來喜再明（当年此の日仍お客と為り，目を病むも今來 再び明なるを喜ぶ）」，また「寄晁曹州大夫（晁曹州大夫に寄す）」（『全宋詩』卷1118）「東方千騎 貴当年，白髮居頭也自賢（東方千騎 当年を貴び，白髮 頭に居るも 也また自ら賢なり）」，清・曹庭棟『宋百家詩存¹⁴³』楊傑¹⁴⁴「和酬致政朱殿丞（致政せし朱殿丞に和酬す）」「今古辭榮人不少，惟公知足最当年（今古 榮に辭する人少なからず，惟だ公のみ 足るを知ることを最も当年なり）」は，老いるのを待たずに致仕することをいう。『董解元西廂記』卷三¹⁴⁵「薄情業種，咱兩個彼各当年（薄情者め，我らふたりはともに若者）」，「彼各当年」は「彼各少年」である。三十種本の元・岳伯川『岳孔目借鉄拐李還魂¹⁴⁶』第二折「則為爾有人才，多嬌態，不老像，正当年（そなたは容姿が美しくて¹⁴⁷なまめかしく，見た目は老けておらず本当に若々しい）」この文の『元曲選』本は，後ろの二句を「不老相，正中年」に作る。中年は壮年の意。（高橋）

12. 当頭 dāngtóu

直面する，前面。薛能¹⁴⁸「牡丹四首」其二（『全唐詩』卷560）「四面宜綈錦，当頭称管弦（四面宜しく綈錦，当頭 管弦に称う）」，これは直面するの意。美しい花を前にして，管弦を奏で宴会を開くのに最もよいとい

う。周邦彦¹⁴⁹「慶宮春」(『全宋词』)「管弦当頭, 偏憐嬌鳳, 夜深簧暖笙清(管弦当頭し, 偏えに嬌鳳を憐れむ, 夜深くして簧暖かく笙清し)」, 『全宋词』無名氏「百宝妝」(『全宋词』)「一抹弦器, 初宴画堂, 琵琶人抱¹⁵⁰当頭(一たび弦器を抹で, 初めて画堂に宴し, 琵琶 人抱きて当頭す)」, みな薛能の詩の用法とはほぼ同じ。劉焯¹⁵¹「惜餘春慢・春雨」(『全宋词』)「鶯花過眼, 蚕麦当頭, 朝日濃陰籠暎(鶯花 眼に過ぎ, 蚕麦 当頭し, 朝日 濃陰 暎を籠む)」, 王奕¹⁵²「水調歌頭・過魯港丁家洲, 乃德祐渡江之地, 有感(魯港の丁家洲を過ぐるに, 乃ち德祐渡江の地にして, 感有り)」(『全宋词』)「追憶金戈鉄馬, 保以油幢玉墨, 烽燧幾秋風。更有当頭著, 全局倚元戎(追憶す 金戈鉄馬, 保つに油幢玉墨を以てし, 烽燧 幾秋風ぞ。更に有り当頭の著, 全局 元戎に倚る)」, また前に当たるの意, ただ時間を意味するようである。白居易「過劉三十二故宅(劉三十二の故宅に過ぎる)」(『全唐詩』卷436)「朝來惆悵宜平過, 柳巷当頭第一家(朝來 惆悵として宜平に過ぎり, 柳巷 当頭 第一家)」, これは「前頭」の意味で, 故宅が柳巷の最前列に有ることをいう。僧・浄端¹⁵³「漁家傲」(『全宋词』)「始向波心通一線, 群魚見, 当頭誰敢先吞嚙(始め波心に向かいて通ること一線, 群魚見る, 当頭誰か敢えて先に吞嚙せん)」, 晏殊¹⁵⁴「木蘭花」(『全宋词』)「当頭一曲情無限, 入破錚琮金鳳戰(当頭一曲 情限り無し, 入破す錚琮 金鳳戰)」, 『永樂大典戲文三種』張協狀元・三十四「当頭莫有人吏(前に役人はいないかい?)」, また三十五「甚麼婦女直入庁前, 門子当頭何不止約(どうして女がずかずか入る, 門番はなぜ前で止めぬ?)」, とともに前頭, 前の意。(高橋)

13. 乾(幹) gān

軽快に響き渡るさまをいう。形容詞。岑参「虢州西亭陪端公宴集(虢州の西亭にて端公の宴集に陪す)」(『全唐詩』卷200)「開瓶酒色嫩, 踏地葉声乾(瓶を開けば 酒色嫩く, 地を踏めば 葉声乾く)」, 温庭筠¹⁵⁵「宿雲際寺(雲際寺に宿る)」(『全唐詩』卷582)「蒼苔路熟僧歸寺, 紅葉声乾鹿在林(蒼苔の路熟して僧は寺に歸り, 紅葉の声乾きて鹿は林に在り)」, 柳永「黄鐘羽・傾杯(杯を傾く)」(『全宋词』)「空塔下, 木葉飄零, 颯颯声乾(空塔の下, 木葉飄零し, 颯颯として声乾く)」, これらの「乾」は草木がこすれる音によって澄みきった響きの意味になる。柳開¹⁵⁶「塞上」(『全宋詩』卷54)「鳴駝直上一千尺, 天静無風声更乾(鳴駝¹⁵⁷ 直上に上る一千尺, 天静かに風無く 声は更に乾けり)」, 陸游¹⁵⁸「井研道中作」(『全宋詩』卷2159)「地瘦竹無葉, 風乾茅有声(地は瘦せて竹に葉無く, 風は乾きて茅に声有り)」, 楊万里「小舟晚興(小舟の晚興)四首」其一(『全宋詩』卷2287)「翦篷旧屋雨声乾, 蘆汾新簷暖日眠(翦篷の旧屋 雨声は乾き, 蘆汾の新簷 暖日に眠る)」, 傅按察¹⁵⁹「鴨頭綠」¹⁶⁰(『全宋词』)「禁庭空土花暈碧, 輦路悄呵喝声乾(禁庭は空しく土花の暈は碧にして, 輦路は悄かに呵喝の声は乾く)」, これらの「乾」は鐃矢の音, 風の音, 叱り声が響き渡る様子の意味になる。蔡伸¹⁶¹「一翦梅」(『全宋词』)「急管飛霜, 羯鼓声乾(急管飛霜, 羯鼓¹⁶²の声 乾く)」, 張孝祥「清平樂・詠梅(梅を詠む)」(『全宋词』)「壠上駟程人遠, 樓頭戍角声乾(壠上の駟程 人は遠く, 樓頭の戍角 声は乾く)」, 辛棄疾「菩薩蛮・双韻賦摘阮」(『全宋词』)「桐葉雨声乾, 珍珠落玉盤(桐葉 雨声乾き, 珍珠 玉盤に落つ)」, 張可久¹⁶³の小令「上小樓・春思」¹⁶⁴(『全元曲』)「雲屏幾宵, 華胥一覺, 翠管声乾(雲屏幾宵, 華胥一たび覺め, 翠管の声は乾く)」, これらは楽器を奏でる音が軽快な様子と響き渡る様子の意味を兼ねる。張養浩¹⁶⁶の小令「十二月兼堯民歌」(『全元曲』)「靈石相間玉潺湲, 筆硯窓前雨声幹(靈石相間し 玉は潺湲たり, 筆硯 窓前 雨声は乾く)」, 李致遠¹⁶⁷の小令「水仙子・春暮」(『全元曲』)「茶惹香散一簾風, 杜宇声乾滿樹紅(茶惹の香は散ず 一簾の風, 杜宇の声は乾く 滿樹の紅)」は上と同じ意味である。「乾鶻」を見よ。

・「乾鶻」 gānquè カササギの鳴き声が軽快に響きわたることから名付けて「乾鶻」という。王充『論衡」¹⁶⁸卷6「龍虚篇」に「狺狺知往, 乾鶻知来(狺狺¹⁶⁹は往を知り, 乾鶻は来を知る)」, 漢・劉歆『西京雜記」¹⁷⁰卷3「乾鶻噪而行人至, 蜘蛛集而百事喜(乾鶻噪りて行人至り, 蜘蛛集りて百事喜ぶ)」, 宋・彭乘撰『墨客揮犀」¹⁷¹卷2「喜鴉声悪鶻声(鴉声を喜び鶻声を悪む)」に「鶻声吉多而凶少, 故俗呼喜鶻, 古所謂乾鶻是也(鶻声は吉多く凶少なし, 故に俗に喜鶻と呼ぶ, 古の所謂乾鶻は是れなり)」, 韓子蒼¹⁷²「送子飛弟蒯南(子飛弟の蒯南に歸るを送る)」(『全宋詩』卷1429)「一年兩附書, 皮筒到家少。那知此相遇, 乾鶻果前兆(一年 兩たび書を附すも, 皮筒 家に到ること少なし。那ぞ知らん 此れ相遇うを, 乾鶻 果して前兆なるか)」, 陸游「寄酬曾學士学宛陵先生体比得書云所寓広教僧舍有陸子泉每对之輒奉懷(曾學士 宛陵先生の体に学ぶに酬ゆるに

寄す ^{この}比ろ書を得て云う 寓する所の広教僧に陸子泉有り 之に対する ^{ごと}毎に ^{おも}輒ち懐いを奉る）（『全宋詩』卷2154）「庭中下乾鵲¹⁷³，門外伝遠書（庭中の下の乾鵲，門外より遠書を伝う）」，王拳之¹⁷⁴の小令「折桂令・閨怨」（『全元曲』）「歎窓前幹鵲無靈，殢定花梢，訴尽春情（窓前に嘆く幹鵲に靈無く，花梢に殢れ定まり，春情を訴え尽くすを）」。「乾」を見よ。（有木）

14. 乾（幹）紅 gānhóng

深紅色（紅色）。陳三聘¹⁷⁵「虞美人・紅木犀」（『全宋詞』）「乾紅翦碎煩織玉，相並黃金粟（乾紅の翦^{せん} 碎煩たる織玉¹⁷⁶，相並ぶ 黄金の粟）」，石正倫¹⁷⁷「漁家傲」（『全宋詞』）「金泥絡縫乾紅袂。従把画図誇絶世（金泥もて絡縫す 乾紅の袂。従りて画図を把つて絶世を誇らん）」，王義山¹⁷⁸「王母祝語・石榴花詩」（『全宋詞』）序文「石榴已著乾紅蕾，無尽春光俛更強（石榴 已に乾紅の蕾^{つぼみ}を著け，尽くる無き春光 俛更強し）」，『六十種曲¹⁷⁹』所収『琵琶記』第30齣「問詢衷情」「假如染就乾紅色 也被傍人講是非（假如い染めて乾紅色に就くとも，也た傍人に是非を講ぜられん）」は，元本『琵琶記¹⁸⁰』第29齣に「假饒染就紺紅色 也被傍人説是非（假饒い染めて紺紅色に就くとも 也た傍人に是非を説られん）」と作るように，「乾紅」は「紺紅」のこと。劉熙『釈名¹⁸¹』卷4「釈綵帛」「紺，含也。青而含赤色也（紺は含なり。青にして赤色を含むなり）」とある。（有木）

15. 乾（幹）虔 gānqián

愚かで無知であること。金刻『劉知遠諸宮調¹⁸²』卷11 58「高平調・賀新郎」「乾虔村叟喬頭腦，画工丹青怎描（乾虔なる村叟^{前園おやじ} 喬頭腦^{インチキ野郎}，画工の丹青 怎でか描かん）」，日本の東北大学中国文学研究室校注本¹⁸³に「乾虔：未詳。おそらくわからずやといった形容詞（双声語）であろう」とある。無名氏『鄭月蓮秋夜雲窓夢』（『全元曲』）第一折【天下楽】「你早売了城南金谷園，乾也波虔，怎過遣（お前はとつくに城南の金谷園¹⁸⁴に売ったならば，乾也波虔，どうしてくれようか）」，この巻の曲の中では，「乾虔」は無知を指す形容詞である。宋・王得臣¹⁸⁵『塵史¹⁸⁶』卷中「京師謂人神識不穎者，呼曰乾（京師 人の神識^{さと} 穎からざる者を謂い，呼びて乾と曰う）」とあり，愚かで無知のことを「乾」と称することの証拠であり，確実に宋金代の慣用語である。「乾虔」は双声韻語でもある。（有木）

16. 乾（幹）支刺 gānzhīlì

味気ないこと。李文蔚¹⁸⁷『同楽院燕青博魚（同楽院にて燕青 魚を博す）』（『全元曲』）第四折「為甚麼乾支刺吐着舌頭，呆不騰瞪着個眼腦（どうして乾支刺をいうのか，あきれて目を見張るばかりだ）」，一言も言い出せないという意。閔漢卿『劉夫人慶賞五侯宴（劉夫人 五侯の宴を慶賞す）』（『全元曲』）第四折「你那裏乾支刺的陪笑売楂梨¹⁸⁸，不須咱道破他早知（お前はそんな乾支刺^{意味の無い}なお世辞を言って作り笑いをしても，言いたいことは既にわかっているぞ）」，これは心からは笑わずに取り繕うこと。（有木）

17. 剛 gāng

①ひとえに，硬い。隋・煬帝¹⁸⁹「夜飲朝眠曲」（『古詩紀』卷151）「憶睡時，待來剛不來（睡時を憶い，待ち來たるも剛に來たらず）」，白居易「惜花（花を惜しむ）」（『全唐詩』卷462）「可憐夭艷正当時，剛被狂風一夜吹（憐むべし 夭艷^{まじ} 正に時に当たるも，剛に狂風に一夜に吹かる）」，盧肇¹⁹⁰「競渡」（『全唐詩』卷551）「向道是龍剛不信，果然奪得錦標歸（向に道う 是れ龍 剛に信せず，果然として錦標を奪い得たりて歸らん）」，杜荀鶴¹⁹¹「送李鐔遊新安（李鐔の新安に遊ぶを送る）」（『全唐詩』卷692）「一間茅屋住不穩，剛出為人平不平（一間の茅屋 住みて穩やかならず，剛いて出ずれば人の平不平を為す）」，貫休¹⁹²「書倪氏屋壁（倪氏の屋壁に書す）三首」其三（『全唐詩』卷827）「春光靄靄忽已暮，主人剛地不放棄（春光 靄靄として忽ち已に暮れ，主人 剛に地は放棄せず）」，元好問¹⁹³「戚夫人」（『全金詩』卷123）「無端恨殺商山老，剛出山來管是非（端

無くも恨殺す 商山の老、剛しいて山を出で来たりて是非を管す)、蘇軾「水調歌頭」(『全宋词』)「堪笑蘭台公子、未解莊生天籟、剛道有雌雄(笑うに堪えたり 蘭台の公子、未だ解かず 莊生の天籟、剛に雌雄有りとう道)」、趙長卿「似娘兒」¹⁹⁴(『全宋词』)「短檠燈燼無人問、此時只有、窓前素月、剛伴相思(短檠 燈燼 人の問う無し、此の時只だ有り、窓前の素月 剛に伴に相思う)」、『花草粹編』卷5¹⁹⁵無名氏「望江南(江南を望む)」「這癡騷、休恁淚漣漣。他是霸陵橋畔柳、千人攀了到君攀。剛甚別離難(この癡騷よ、恁 涙の漣漣たるを休めよ。他は是れ霸陵橋畔の柳なり、千人攀り了えて君の攀るに到る。剛に甚だ別離し難し)」、また同じく卷8¹⁹⁶無名氏「相思會」「人無百年人、剛作千年調(人に百年の人無し、剛に千年の調べを作す)」、『董解元西廂記』卷4¹⁹⁷「幸自沒嗔剛做嗔、渾不似那臨危忙許親(怒る筋合いもないのに剛に怒りおって、あの危なくなつて慌てて婚姻を決めたのと大違い)」、また卷3¹⁹⁸「捩恰才的做作、心腸料必如土木、剛誇貞烈、把人恥辱(以前の振舞いよりすれば、その心根は土木のように味気ないものに違いない。剛に貞烈を自慢して、人に恥をかかせている)」、鄭光祖『傷梅香騙翰林風月(傷梅香 翰林の風月を騙す)』(『全元曲』)第2折「忙哀告、膝跪着。強紮掙、剛陪笑(跪いてお願いし、やせ我慢してでも剛に挨拶をします)」、ここでの「剛」と「強」はともに「硬い」の意味があり、ここに挙げたのは互文である。

②ただ、ひとえに。温庭筠「題西平王旧賜屏風(西平王旧賜の屏風に題す)」(『全唐詩』卷528)「世間剛有東流水、一送恩波更不迴(世間に剛だ東流の水有るのみ、一たび恩波を送れば更に迴らず)」、皮日休¹⁹⁹「奉酬魯望醉中戲贈(魯望の醉中にて戯れに贈るに奉酬す)」(『全唐詩』卷615)「剛恋水雲歸不得、前身應是太湖公(剛えに水雲に恋して歸り得ず、前身 應に是れ太湖公なるべし)」、辛棄疾「水調歌頭・壽韓南澗七十」²⁰⁰(『全宋词』)「上古八千歲、才是一春秋。不応此日、剛把七十壽君侯(上古 八千歲、才かに是れ一春秋。此の日に応じず、剛だ七十を把りて君侯を寿ぐ)」、李壽卿²⁰¹『說罇諸伍員吹簫(罇諸に説きて伍員簫を吹く)』(『全元曲』)第3折「枉教你頂天立地、空教你帶眼安眉。剛一味、胡支對(あなたはむなしく天地を支え、無駄に眼と眉を帯び、剛にごまかして抑圧されている)」、蕭德祥²⁰²『楊氏女殺狗勸夫(楊氏の女 狗を殺し夫を勸む)』(『全元曲』)第3折「別件都依得、剛除背死人(剛だ死人を背負うことだけを除けば、他のことは何でもしよう)」、この「剛」は、ただ死体を背負うことだけはしないという意味。『詞林摘艷』²⁰³卷5劉庭信²⁰⁴「夜行舡・青樓詠妓」「腰瘦剛争不姓沈、被閑愁惱至如今(腰瘦 剛だ争でか沈を姓とせざる、閑愁せられ悩みて如今に至る)」、こゝも「ただ」の意で、「争」は多少の意味で、ただどうして沈と異なるのかという意味。つまり腰瘦は沈約のこと²⁰⁵で、沈と名のらないだけである。楊朝英『朝野新声太平樂府』²⁰⁶卷2吳西逸²⁰⁷の小令「水仙子」「寄來書剛写箇鴛鴦字、墨痕湮透紙、吟不成幾句新詩(書を寄せ来たりて剛に箇の鴛鴦の字を写す、墨痕 湮透の紙、吟ずるも幾句かの新詩と成らず)」は同じ意味。また同卷7周仲彬²⁰⁸「青杏子・元宵」「剛道了箇安置、都別無話、意遲遲手捻梅花(剛だ箇の安置を道了えり、都て別に話無く、意うに遲遲として手ずから梅花を捻る)」も同じ意味。「安置」は敬語であり、当世のいわゆる「おうかがい」のこと。

③ひとえにと硬いとただの三つの意を兼ねる。陳允平²⁰⁹「雪」(『全宋词』卷3516)「可笑世情剛道冷、不知片片是陽春(笑うべし 世情 剛えに冷たきを道う、知らず片片として是れ陽春なるを)」、張先²¹⁰「菩薩蠻」(『全宋词』)「含笑問檀郎、花強妾貌強、檀郎故相惱、剛道花枝好(笑みを含みて檀郎に問う、花の強きか妾の貌の強きかと、檀郎 故に相悩む、剛だ道う 花枝好し)。(有木)

18. 各 gè

みな、すべての意。総括して言う。杜甫「乾元中寓居同谷県作歌(乾元中、同谷県に寓居して作る歌)七首」其三(『全唐詩』卷218)「有弟有弟在遠方、三人各瘦何人強(弟有り 弟有り 遠方に在り、三人各瘦せて何人か強やかならん)」、また「宴王使君宅題(王使君が宅に宴して題す)二首」其一(『全唐詩』卷232)「吾徒自漂泊、世事各艱難(吾が徒 自ら漂泊す、世事 各て艱難)」、送顧八分文学適洪吉州(顧八分文学が洪・吉州に適くを送る)』(『全唐詩』卷223)「三人並入直、恩沢各不二(三人 並びに入直す、恩沢 各て不二なり)」、寄柏学士林居(柏学士が林居に寄す)』(『全唐詩』卷222)「幾時高議排金門、各使蒼生有環堵(幾時か高議 金門を排して、各て蒼生をして環堵有らしめん)」、泛江送魏十八倉曹還京因寄岑中允參范郎中季

明（江に泛^うかびて魏十八倉曹が京に還^{かえ}るを送り、因りて岑中允參・范郎中季明に寄す）」（『全唐詩』卷227）「若逢岑与范，為報各衰年（若し岑と范とに逢わば，為めに報ぜよ各衰年なりと）」、「為報」は「私に代わって告げよ」の意。柳宗元「田家三首」其二（『全唐詩』卷353）「里胥夜經過，雞黍事筵席。各言官長峻，文字多督責（里胥²¹¹夜 經過し，雞黍 筵席を事とす。各言 官長峻しく，文字 督責多しと）」，李商隱「二月二日」（『全唐詩』卷539）「花鬚柳眼各無頼，紫蝶黃蜂俱有情（花鬚 柳眼²¹² 各て無頼²¹³，紫蝶 黃蜂 俱に情有り）」。（有木）

19. 共 gōng

①程度が甚だしいことをいう。とても。苦^{はなは}だ。人とは異にするという意。謝朓²¹⁴「和伏武昌登孫權故城（伏武昌が孫權の故城に登るに和す）」（『文選』卷30）「文物共葳蕤，声明且葱蒨（文物 共だ葳蕤として，声明 且つ葱蒨²¹⁵たり）」，「葳蕤」とは盛んな様子。文物がとても盛んであることを言う。杜甫「独酌成詩（独酌して詩を成す）」（『全唐詩』卷225）「兵戈猶在眼，儒術豈謀身。共被微官縛，低頭愧野人（兵戈 猶お眼に在り，儒術 豈に身を謀らんや。共だ微官に縛せられ，頭を低れて野人に愧ず）」，「共」は一に「苦」に作り，「共」は「苦だ」の意味，「苦」もきわめての修辭，「共被」は「苦だ～せらる」と同様。

②きわめての意。深い，細い。白居易「潯陽秋懷贈許明府（潯陽の秋懷 許明府に贈る）」（『全唐詩』卷440）「共思除醉外，無計奈愁何（共く思ふ 酔を除くの外，愁いを奈何とも計る無きを）」，「共思」は深く思ふ，あるいは細やかに思ふの意味。李嘉祐²¹⁶「答泉州薛播使君重陽日贈酒（泉州の薛播使君 重陽の日に酒を贈るに答う）」（『全唐詩』卷207）「共知不是潯陽郡，那得王弘送酒來（共く知る 是れ潯陽郡ならざるを，那ぞ王弘 酒を送り來たるを得ん）」，「共知」は「深く知る」こと。劉長卿「夏中崔中丞宅見海紅搖落一花獨開（夏中 崔中丞の宅にて海紅の搖落して一花 獨り開くを見る）」（『全唐詩』卷147）「共憐芳意晚，秋露未須溥（共く憐む 芳意の晩，秋露 未だ溥きを須いず）」，「共憐」は「深く憐れむ」こと。秦韜玉「貧女」（『全唐詩』卷670）「誰愛風流高格調，共憐時世儉梳粧（誰か愛す 風流 格調高く，共く憐む 時世の梳粧に儉なるを）」，「憐」には惜しむの意味がある，352頁「可憐」を参照，この「共憐」は深くこれを惜しむの意味。「時世」とは時の流れの意味で，今の「時髦」と同様。白居易「新樂府・時世粧・徹戎也（戎を徹むるなり）」（『全唐詩』卷427）「元和粧梳君記取，髻堆面赭非華風（元和の粧梳 君 記取せよ，髻堆²¹⁷面赭²¹⁸華風に非ず）」，牛嶠²¹⁹「女冠子四首」其一（『全唐詩』卷892）「綠雲高髻，點翠勻紅時世（綠雲 高髻，翠を点じ紅を時世に勻しくす）」とある。これらはすべて流行の意味で「風流」をいう。白居易「江南喜逢蕭九徹因話長安旧遊戲贈五十韻（江南にて蕭九徹に逢うを喜びて，因りて長安の旧遊と語り，戯れに五十韻を贈る）」（『全唐詩』卷462）「時世高梳髻，風流淡作粧（時世 高く髻を梳り，風流 淡く粧いを作す）」，また「代書詩一百韻寄微之（書を代うる詩一百韻 微之に寄す）」（『全唐詩』卷436）「風流誇墮髻，時世鬪啼眉（風流 墮髻を誇り，時世 啼眉²²⁰を鬪わす）」，これらもみな「時世」と「風流」で対をなし，秦韜玉「貧女」と同じ。「共憐時世儉梳粧」とは，時世に合わせて化粧の贅沢を深く惜しむこと，故に「儉梳粧」という。この「共」の字がもし主人に従う人という意味であれば，「貧女」とは未婚の女性で，取えて良縁に頼らないため，他の人より深く憐れみ，友情がうまくいかないことをとても嫌っていることを言う。陳師道「九月十三日出善利門（九月十三日 善利門を出ず）」（『全宋詩』卷1114）「去国吾何意，帰田病不関，共看霜白鬢，似得半生閑（国を去る 吾 何の意ぞ，帰田して病 関わらず，共かに見る 霜白の鬢，半生の閑を得るに似たり）」，「共看」は細かく見ること。陳与義「陳叔易賦王秀才所藏梁織仏図詩邀同賦因次其韻（陳叔易 王秀才が蔵する所の梁の織仏図の詩を賦して邀えて同に賦せしむ 因りて其の韻に次す）」（『全宋詩』卷1735）「共惟此事不思議，細看衆巧無遺蹤（共く惟う 此の事 思議せざるを，細かに見る 衆巧の遺蹤無きを）」，「共惟」は深く思ふこと。細かく見ることと相対である。晁端礼「綠頭鴨・詠月（月を詠ず）」（『全宋词』）「共凝恋，如今別後，還是隔年期（共く凝恋し，如今 別れし後，還た是れ年期を隔つるを）」，「共凝恋」は深くもの思いにふけること。（有木）

20. 骨 gǔ

心の意。江淹²²¹「別賦」(『文選』巻6)「心折骨驚(心折れ骨驚く)」、李善の注に「互文也」とある。これによると、後世の人も「骨」字によって「心」の意に用いる。杜甫「投簡成華兩県諸子(成華の兩県の諸子に投簡す)」(『全唐詩』巻219)「長安苦寒誰独悲, 杜陵野老骨欲折(長安の苦寒 誰か独り悲しむ, 杜陵の野老 骨折れんと欲す)」、骨が折れようとするとは、心がかじけようとすることであり、心が折れようとするとは、魂が断たれようとするのである。孟浩然²²²「送従弟邕下第後尋会稽(従弟邕 下第の後, 会稽を尋ぬるを送る)」(『全唐詩』巻159)「向來共歛娛, 日夕成楚越。落羽更紛飛²²³, 誰能不驚骨(向來 共に歛娛し, 日夕 楚越と成る。羽を落として更に紛飛し, 誰か能く骨を驚かさざらん)」、驚骨の字は江淹「別賦」に基づく。李賀²²⁴「許公子鄭姬歌(許公子の鄭姫の歌)」(『全唐詩』巻393)「莫愁簾中許合歛, 清弦五十為君彈。彈声咽春弄君骨, 骨興牽人馬上鞍(愁うる莫かれ 簾中 合歛を許し, 清弦五十 君が為に弾ず。彈声 春に咽びて君が骨を弄す, 骨興し 人を牽く 馬上の鞍)」、弄君骨は相手の心が動くこと、「骨興」は心が興奮すること。姚合²²⁵「聞新蟬寄李余(新蟬を聞きて李余に寄す)」(『全唐詩』巻502)「往年六月蟬應到, 每到聞時骨欲驚(往年六月 蟬 應に到るべし, 毎に聞きし時に到りて 骨 驚かんと欲す)」、骨は一に「心」に作る。つまり骨と心は同じ意味である。

・「心骨」xīngǔ 「心」の意。元稹「連昌宮詞」(『全唐詩』巻419)「我聞此語心骨悲, 太平誰致乱者誰(我此の語を聞いて心骨悲しむ, 太平は誰か致し 乱す者は誰ぞと)」、これは心悲しむこと。李賀「開愁歌(愁いを開く歌)」(『全唐詩』巻392)「主人勸我養心骨, 莫受俗物相填鉞(主人 我に勸む 心骨を養い, 俗物の相填鉞するを受くる莫かれと)」、これは心を養うの意。また、「送沈亞之之歌(沈亞之を送る歌)」(『全唐詩』巻390)「吾聞壯夫重心骨, 古人三走無摧挫(吾聞く 壯夫は心骨を重んずと, 古人 三走するも摧挫²²⁶する無し)」、この「心骨」の字は「志氣」あるいは「意氣」の意である。黃庭堅²²⁷「鷓鴣天」(『全宋詞』)「万事令人心骨寒, 故人墳上土新乾(万事 人の心骨をして寒からしむ, 故人 墳上の土 新たに乾く)」、これは心が凍えることをいう。(有木)

21. 貴 guì

欲す。須らく〜べし。白話では「〜したい」という意味もある。現代の助動詞とほぼ同じ使い方である。杜甫「李潮八分小篆歌(李潮が八分小篆の歌)」(『全唐詩』巻222)「苦県和尚骨立, 書貴瘦硬方通神(苦県の光和は尚骨立す, 書は瘦硬にして方に神に通ず貴し)」、苦県とは苦県にある老子碑を指す。蔡邕(133-192)の書として漢の光和年間(178-184年)に建てられた。「貴瘦硬」は「須らく瘦硬すべし」という意味。宋之問²²⁸「答李司戸夔(李司戸夔に答う)」(『全唐詩』巻52)「弄琴宜在夜, 傾酒貴逢春(琴を弄して宜しく夜に在るべし, 酒を傾けて春に逢う貴し)」、貴と「宜」は互文である。戎昱²³⁰「花下宴送鄭鍊師(花下に宴して鄭鍊師に送る)」(『全唐詩』巻270)「愁裏惜春深, 聞幽即共尋。貴看花柳色²³¹, 囚放別離心(愁裏 春の深きを惜しみ, 幽を聞きて即ち共に尋ぬ。花柳の色を看んと貴し, 別離の心を放つを囚)」、貴と「囚」は互文である。張籍²³²「寄王六侍御(王六侍御に寄す)」(『全唐詩』巻385)「貴得葉資將助道, 肯嫌家計不如人(葉資を得て將て助道せんと貴す, 肯へて家計²³³を嫌うは人に如かず)」、元稹「送崔侍御之領南二十韻(崔侍御の領南に之くを送る 二十韻)」(『全唐詩』巻406)「試蠱看銀黑, 排腥貴食鹹(蠱を試みて銀黒を看, 腥を排して鹹を食らわんと貴す)」、小序に「海物多肥腥, 啖之多嘔泄。驗方云, 備之在鹹食(海物 肥腥多し, これを啖せば嘔泄多し。驗方に云う, これを備うるに鹹食在り)」とある。李商隱「無題二首」其二(『全唐詩』巻539)「幽人不倦賞, 秋暑貴招邀。竹碧轉悵望, 池清尤寂寥(幽人 倦賞せず, 秋暑 招邀す貴し。竹 碧く轉た悵望し, 池 清く尤も寂寥たり)」、友人を遊びに招くもまだ来ないことを言っている。陸龜蒙²³⁴「奉和襲美太湖詩(襲美太湖に和し奉る詩)二十首・桃花塢」(『全唐詩』巻618)「行行問絕境, 貴与名相親。空經桃花塢, 不見秦時人(行き行きて絶境を問いて, 名と相親しむ貴し。空しく桃花の塢を経て, 秦時の人に見えず)」、これも元々名実を求めようと桃源郷を訪れたが、結局は桃源郷の人に会えなかったという意味。司空圖「馮燕歌(馮燕の歌)」(『全唐詩』巻634)「新人藏匿旧人起, 白昼喧呼駭隣里。誣執張嬰不自明, 貴

生前遭考捶（新人 蔵匿すれば旧人 起ち，白昼 喧呼して隣里を駭かす。張嬰を誣執するは自明ならず，生前 考捶に遭うを免る貴し），辛棄疾「沁園春・帶湖新居將成（帶湖の新居 將に成らんとす）」（『全宋詞』）「意倦須還，身閑貴早，豈為尊羹鱸膾哉（意は倦めば須らく還るべし，身は閑なれば早にす貴し，豈に尊羹鱸膾²³⁵を為さんや）」，意味は同じ。「貴」のこの用法は唐宋の散文中にはほとんど見られない。『文鏡秘府論²³⁶』卷4南卷「論文意」の条「詩議」を引き，「夫希世之珠，必出驪龍之頷，況通幽含變之文哉。但貴成章以後，有其易貌，若不思而得也（夫れ希世の珠は，必ず驪龍の頷に出ず，況んや通幽含變の文をや。但だ章を成す貴き以後は，其の易きの貌有りて，思わずして得たるが若し）」，「貴成章以後」とは「文章ができて後」のことである。歐陽修「与梅聖俞書（梅聖俞に与うる書）」（『文忠集』卷149）「又為妻子要去婦省其母，亦欲過中祥，遣他去，貴先知彼中遠近爾（又 妻子の為に要め去りて其の母を婦省し，亦た中祥を過ぎんと欲せば，他をして去らしむるに，先ず彼の遠近に中るを知らんと貴するのみ）」，先ずはその土地が遠いか近いかを知るべきであるという意味である。他にも清・劉淇『助字弁略』卷4に「貴」字の項目²³⁷があり，わずかに前漢・劉向『戦国策』卷2「東周」「貴合於秦以伐齊（秦に合して以て齊を伐つを貴せばなり）」の文と鮑彪注に「貴，猶欲也」とある一例が挙げられている。これによって，この用法の来源はとても古いと推測できる。また「貴欲」を見よ。

・「貴欲」 guiyù 「貴」に「欲す」の意味があることから，二字を併せて一つの語を作る。いわゆる同義重言である。王建²³⁸「尋樞歌（尋樞の歌）」（『全唐詩』卷298）「斯須改變曲解新，貴欲²³⁹歡他平地人（斯に須らく曲解を改変して新たにすべし，他の平地の人を歡ばんと貴欲す）」，また「送衣曲（衣を送る曲）」（『全唐詩』卷298）「絮時厚厚綿纂纂，貴欲征人身上暖（絮は時に厚厚として綿は纂纂たり，征人の身上暖かにせんことを貴欲す）」，韓愈「東都遇春（東都にて春に遇う）」（『全唐詩』卷339）「得閑無所作，貴欲辭視聽。深居疑避仇，默臥如当暝（閑を得るも作す所無く，視聽を辞せんと貴欲す。深居して仇を避けんかとを疑う，默臥して暝に当たるが如し）」，この三例の「貴欲」は実際にしてみたい，あるいはそのようにしたいという意味である。「貴」を見よ。（有木）

おわりに

本稿においても，唐詩の語彙には多くの異読のあることが確認できる。「衝」に「おかす」の意味があることは日本の古辞書には見えず，「衝天」は現代の漢和辞典ではほぼ「天をつく」と解釈している。しかし，用例にある杜甫の「暮秋將歸秦留別湖南幕府親友」詩の「衝雨雪」を「雨雪をつく」と読んで，意味が取りづらい。また「帶」は，白居易の「長恨歌」の有名な句「梨花一枝春帶雨」では花が雨に濡れている光景として「雨をおぶ」と読めるが，用例にある李白の「涇溪南藍山下有落星潭可以卜築余泊舟石上寄何判官昌浩」詩の「沙帶秋月明」は砂が月の光をおびていると読んで解釈しづらい。このような異読の例を中華書局編輯部編『詩詞曲語辭典』から収載した後，本稿の「はじめに」でも述べたように意読の特徴や文化的背景について考察して行きたい。

ただ，この作業の過程で中華書局編輯部編『詩詞曲語辭典』が用例について原典を全て確認しているかどうか，注意が必要であることがわかった。本稿では主として，唐代の詩は中華書局版『全唐詩』（全25冊），宋詩は北京大学古文献研究所編『全宋詩』（北京大学出版社，全72冊），宋詞は唐圭璋編『全宋詞』（中華書局，全5冊），元曲は徐征等編『全元曲』（河北教育出版社，全12冊）により確認し，他は適宜書籍を参照して該当する用例をコピーし保管している。また，語彙の解釈についてやや疑問に思うところもあり，今後の唐詩異読の研究のためには検討対象として重要であると考え，『詩詞曲語辭典』の解釈に即して用例の読解を進めている。用例の読解については，文字の異同にも留意して注釈等があれば参照しているが，調べのつかない用例もあり，やはり誤読する可能性があることを免れないと考える。ご指教を仰ぐ次第である。

（付記）本稿は平成28年度文部科学省科学研究費助成事業基盤研究C「唐詩における異読の包括的研究」（研究代表者 東京学芸大学佐藤正光）における研究成果のひとつである。東京学芸大学大学院生高梨詩織，井草吉識の両氏にも校勘を担当して頂いた。

注

- 1 杜甫 (712-770), 字は子美, 原籍は河南省鞏県, 襄陽 (河南省洛陽市南) のひと。
- 2 『全唐詩』(中華書局, 1960年)。以下, 唐詩の引用にはすべて本書を用いた。
- 3 李白 (701-762), 字は太白, 号は青蓮居士。西域に生まれ, 幼少期に蜀の青蓮郷 (四川省江油県) に移り住んだと言われる。
- 4 韓愈 (768-824), 字は退之, 諡は文公, 鄧州南陽 (河南省孟州市) のひと。
- 5 白居易 (772-846), 字は楽天, 号は香山居士。原籍は下邳 (陝西省渭南県), 河南新鄭 (鄭州新鄭) のひと。
- 6 元稹 (779-831), 字は微之, 河南洛陽 (河南省洛陽市) のひと。
- 7 李德裕「謫嶺南道中作」(『全唐詩』巻475) 詩か。
- 8 『全唐詩』は「概」につくる。
- 9 『全唐詩』は「啓」につくる。
- 10 「村雨」詩か。
- 11 陳子昂 (661-702), 字は伯玉, 梓州射洪 (四川省射洪県) のひと。
- 12 高適 (700-765), 字は達夫, 渤海 (河北省景県) のひと。
- 13 岑参 (715?-770), 字は不明, 南陽 (河南省南陽市) のひと。
- 14 成公綏 (231-273), 西晋のひと, 字は子安, 東郡白馬 (河南省) のひと。
- 15 『文選』(上海古籍出版社, 1986年)。以下同じ。
- 16 柳宗元 (773-819), 字は子厚, 河東 (山西省永濟県) のひと。
- 17 劉琨 (271?-318), 西晋末のひと, 字は越石, 魏昌 (河北省無極県) のひと。
- 18 「秋日鍊薬院鑷白髮贈元六兄林宗 (秋日鍊薬院にて白髮を鑷し元六兄林宗に贈る)」(『全唐詩』巻169) か。
- 19 『全唐詩』は「抵」につくる。
- 20 『莊子』山木篇に, 莊子が山中で木こりと会った際, 葉の生い茂る木を切らない理由を尋ねると, 木こりは「使い物にならないからだ」と答えた。そこで莊子は「木は不材によって天寿を終えることができた」と言ったとある。
- 21 漢・宣帝の時の名臣疏広と, 兄の子の疏受をいう。
- 22 王禹偁 (954-1001), 宋のひと, 字は元之, 濟州鉅野 (山東省巨野) のひと。
- 23 北京大学古文献研究所編『全宋詩』(北京大学出版社, 1991年)。以下同じ。
- 24 劉言史 (?-812), 唐のひと, 洛陽 (河南省洛陽市) のひと。
- 25 秦韜玉 (生卒年不詳), 唐のひと, 字は仲明, 京兆 (陝西省西安市) のひと。
- 26 陰鷲は, 陰徳のこと。
- 27 羅隠 (833-909), 唐のひと, 本名は横, 字は昭諫, 新城 (浙江省富陽) のひと。
- 28 司馬遷 (前145 (135) -?), 前漢のひと, 字は子長, 夏陽 (陝西省韓城南芝川鎮) のひと。
- 29 注15『文選』は「聖賢」につくる。
- 30 朱淑真 (1135?-1180?), 宋のひと, 号は幽棲居士, 錢塘 (浙江省杭州市) のひと。
- 31 劉敏中 (1243-1318), 元のひと, 字は端甫, 号は中庵, 章丘 (山東省) のひと。
- 32 唐圭璋編『全金元詞』(中華書局, 1979年)。
- 33 錢南揚校注『永樂大典戲文三種校注』(中華書局, 1979年)。
- 34 『董解元西廂記』(人民文学出版社, 1962年)。
- 35 注34『董解元西廂記』は「由」につくる。
- 36 欧陽修 (1007~1072), 宋のひと, 字は永叔, 諡は文忠, 吉州廬陵 (江西省吉安市) のひと。
- 37 『欧陽文忠公集』(四部叢刊初編, 1989年) 所収。
- 38 陰鏗 (生卒年不詳), 南陳のひと, 字は子堅, 武威姑臧 (甘肅省武威) のひと。
- 39 遼欽立輯校『先秦漢魏晋南北朝詩』(中華書局, 1983年)。
- 40 劉長卿 (?-789?), 唐のひと, 字は文房, 河間 (河北省) のひと。
- 41 薛據 (生卒年不詳), 唐のひと, 河中宝鼎 (山西省万榮西南) のひと。
- 42 秦系 (生卒年不詳), 唐のひと, 字は公緒, 会稽 (浙江省) のひと。

- 43 侯真（生卒年不詳），宋のひと，字は彦周，東武（山東省諸城）のひと。
- 44 唐圭璋編『全宋詞』（中華書局，1965年）。以下同じ。
- 45 朱彝尊・汪森編『詞綜』（上海古籍出版社，1978年）。
- 46 王燧（?-1783），江蘇如皋馬塘（江蘇省南通市）のひと。
- 47 日が高く昇ったさま。
- 48 王羲之（303-361），東晋のひと，字は逸少，琅邪臨沂（山東省）のひと。
- 49 明・張溥『漢魏六朝百三名家集』（江蘇広陵古籍刻印社，1990年）。
- 50 沈約（441-513），南朝梁のひと，字は休文，吳興武康（浙江省湖州南）のひと。
- 51 『全唐詩』は「春」につくる。
- 52 皇甫冉（718?-771?），唐のひと，字は茂政，潤州丹陽（江蘇省鎮江市）のひと。
- 53 羊士諤（762?-819），唐のひと，泰安泰山（山東省）のひと。
- 54 『全唐詩』は「綵」につくる。
- 55 黎逢（生卒年不詳），唐のひと，貫籍と字はともに不詳。
- 56 司空図（837-908），唐のひと，字は表聖，河中郡虞郷（山西省永濟県）のひと。
- 57 仲殊（生卒年不詳），宋のひと，字は師利，安州（湖北省安陸）のひと。
- 58 蔡礼鴻『敦煌変文字義通釈（増訂版）』（上海古籍出版社，1981年）。
- 59 『全唐詩』は「顛頷」につくる。
- 60 王士禛『池北偶談』（清代資料筆記叢刊，中華書局，1982年）。
- 61 趙善扛（1141-?），宋のひと，字は文鼎，号は解林居士，隆興（江西省南昌）のひと。
- 62 宋・黄升『花庵詞選』（遼寧教育出版社，1997年）。
- 63 晁端礼（1046-1113），宋のひと，字は次膺，開德府清豊県（河南省）のひと。
- 64 『全宋詞』は「雨中花慢」につくる。
- 65 男女の情事の比喩。
- 66 張元幹（1091-約1161），宋のひと，字は仲宗，号は蘆川居士，真隠山人。蘆川永福（福建省永泰県）のひと。
- 67 王以寧（生卒年不詳），宋のひと，字は周士，湘潭（湖南省）のひと。
- 68 安期生，または安期という，仙人の名。
- 69 毛滂（1061-?），宋のひと，字は澤民，号は東堂，衢州江山石門鎮（浙江省江山市）のひと。
- 70 晁補之（1053-1110），宋のひと，字は無咎，号は帰来子，濟州鉅野（山東省巨野県）のひと。
- 71 朱敦儒（1081-1159），宋のひと，字は希真，洛陽（河南省洛陽市）のひと。
- 72 王学奇主編『元曲選校注』（河北教育出版社，1994年）所収。
- 73 蘇軾（1036-1101），宋のひと，字は子瞻，号は東坡，眉州眉山（四川省眉山県）のひと。
- 74 韓愈の甥の名。韓愈「醉贈張秘書（酔いて張秘書に贈る）」（『全唐詩』巻337）に「阿買不識字，頗知書八分」とある。
- 75 陳与義（1091-1139），宋のひと，字は去非，号は簡齋，洛陽（河南省洛陽市）のひと。
- 76 『全宋詩』は詩題を「諸公和淵明止酒詩因同賦」に作る。
- 77 劉克莊（1187-1269），宋のひと，字は潜夫，号は後村，莆田（福建省）のひと。
- 78 退居とは世を避けて暮らすこと。寮とは僧房のこと。
- 79 楊万里（1127-1206），宋のひと，字は廷秀，号は誠齋，吉水（江西省）のひと。
- 80 『全宋詞』は「夢中作梅詞」につくる。
- 81 元・楊朝英撰，隋樹森校訂『朝野新声太平楽府』（中華書局，1958年）。
- 82 家世，出身のこと。
- 83 官僚の邸宅，宮中の役所。
- 84 元・無名氏撰，隋樹森校訂『梨園按詩楽府新声』（中華書局，1958年）。
- 85 尽場兒は，完全に，または結局の意味。
- 86 発科は，芝居で演技により観客の注目を引くこと，または笑わせること。
- 87 王季思主編『全元戯曲』（人民文学出版社，1999年）所収。
- 88 王学奇主編『元曲選校注』（河北教育出版社，1994年）所収。

- 89 王学奇主編『元曲選校注』(河北教育出版社, 1994年)所収。
- 90 柳永(約987-約1053), 宋のひと, 字は耆卿, 崇安(福建省武夷山)のひと。
- 91 『全宋词』は「竚」につくる。
- 92 王安石(1021-1086), 宋のひと, 字は介甫, 撫州臨川(江西省臨川市)のひと。
- 93 『全宋词』は「竚」につくる。
- 94 『全宋词』は「竚」につくる。
- 95 小鳥の鳴く声。
- 96 『全宋词』は「竚」につくる。
- 97 玉骨は梅の別称。氷肌は清らかな肌。
- 98 史浩(1106-1194), 宋のひと, 字は直翁, 号は真隱居士, 鄞峰真隱。明州鄞県(浙江省鄞州区)のひと。
- 99 肌のきめのこと。
- 100 流行のこと。
- 101 辛棄疾(1140-1207), 宋のひと, 字は幼安, 号は稼軒, 歴城(山東省済南市)のひと。
- 102 『全宋词』は「竚」につくる。
- 103 『全宋词』は「絳」を「緋」につくる。緋手とは女性の美しい手のこと。
- 104 軽くたおやかな容姿のこと。
- 105 蘇舜欽(1008-1048), 宋のひと, 字は子美, 開封(河南省開封市)のひと。
- 106 杜安世(生卒年不詳), 字は寿域(一に名を寿に作り, 字は安世ともいう), 京兆(陝西省西安市)のひと。
- 107 あでやかで美しい様子。
- 108 張孝祥(1132-1170), 宋のひと, 字は安国, 号は于湖居士。四川簡州(四川省簡陽市)に生まれ歴陽烏江(安徽省和县)に移り住んだ。
- 109 『全宋词』は「澹」につくる。
- 110 銀糸はお茶の名。銀の糸のようなもの。ここでは細い芽を指すか。
- 111 趙長卿(生卒年不詳), 号は仙源居士, 南豊(江西省撫州市南豊県)のひと。
- 112 『全宋词』は「醒」に作る。
- 113 卓文君のこと。
- 114 李之儀(1048-1117), 宋のひと, 字は端叔, 号は姑溪居士, 姑溪老農。滄州無棣(山東省濱州市無棣)のひと。
- 115 浅黄色のこと。
- 116 蜂の触角のこと。
- 117 李煜(937-978), 南唐の中主李璟の第六子, 初め名は從嘉, 字は重光, 号は鐘隱, 蓮峰居士。彭城(江蘇省徐州銅山区)のひと。南唐の最後の皇帝。
- 118 曾昭岷他編『全唐五代詞』(中華書局, 1999年)。
- 119 王之道(1093-1169), 字は彦猷, 廬州濡須(安徽省合肥市)のひと。
- 120 趙師俠(生卒年不詳), 一に名を師使, 字は介之, 号は坦庵。太祖の子・燕王趙德昭の七世。新淦(江西省新干)に住んでいた。
- 121 おしろい, または化粧をほどこした華やかな顔。
- 122 宋・丁度等編『集韻』(上海古籍出版社, 1985年)。
- 123 木華(生卒年不詳), 西晋のひと, 字は玄虚, 広川(河北景県)のひと。
- 124 注15『文選』は「騰波」につくる。
- 125 豊韻語。広大な様子。
- 126 ここでは下に流れていくことの意味か。
- 127 呉師孟は呉縝(生卒年不詳, 成都のひと, 北宋の史学家)の父。
- 128 『全宋词』は「竚」につくる。
- 129 天葩は天然の美しい花。国艶は国で一番の美しいもの。
- 130 『全宋词』は「香」を「春」に作る。
- 131 薄曇りのこと。

- 132 わずかばかり，いくつかのいみ。
- 133 令狐楚（766-837），唐のひと，字は殺士，敦煌（甘肅省）のひと。
- 134 『全唐詩』は「為樂」に作る。
- 135 李商隱（812（813?）-858），唐のひと，字は義山，号は玉谿生，懷州河内（河南省沁陽市）のひと。
- 136 馮浩箋注『玉谿生詩集箋注』（上海古籍出版社，1979年）。
- 137 宴席に侍ること。
- 138 王族や賢人の喩え。
- 139 陳師道（1053-1101），字は履常，または無己，号は後山居士，彭城（江蘇省徐州市）のひと。
- 140 大臣のこと。
- 141 帰郷すること。
- 142 『全宋詩』は「常年」につくる。
- 143 清・曹庭棟編『宋百家詩存』（『景印文淵閣四庫全書』，1983-1986年，所収）。四庫全書体は本文の「公」を「君」に作る。
- 144 楊傑（生卒年不詳），宋のひと，字は次公，無為（安徽省）のひと。
- 145 注34『董解元西廂記』は巻4に収める。
- 146 徐泌君校『新校元刊雜劇三十種』（中華書局，1980年）。
- 147 王学奇『元曲選校注』注に「姿色」と記すのによる。
- 148 薛能（?-880），唐のひと，字は大拙，汾州（山西省汾陽）のひと。
- 149 周邦彦（1056-1121），宋のひと，字は美成，杭州錢塘（浙江省杭州市）のひと。
- 150 『全唐詩』は「把」につくる。
- 151 劉璣（生卒年不詳），元のひと，字は起潜，南豊（江西省）のひと。
- 152 王奕（生卒年不詳），宋のひと，字は伯敬（亦大），玉山（江西省）のひと。
- 153 浄端（生卒年不詳），宋のひと，字は明表。
- 154 晏殊（991-1055），宋のひと，字は同叔，撫州臨川（江西省撫州）のひと。
- 155 温庭筠（812-872），字は飛卿。并州太原（山西省）のひと。
- 156 柳開（948-1001），字は中塗。大名（河北省）のひと。
- 157 鏑矢のこと。
- 158 陸游（1125-1209），宋のひと，字は務観，号は放翁。越州山陰（浙江省紹興）のひと。
- 159 傅按察（正卒年不詳），名は不詳。按察は官名。
- 160 『全宋詞』は「緑頭鴨」につくる。
- 161 蔡伸（1088-1156），宋のひと，字は伸道。莆田（福建省）のひと。
- 162 打楽器のひとつ。
- 163 張可久（1270-1348?），字は伯遠，号は小山。慶元路（浙江省寧波）のひと。
- 164 『全元曲』では「懷古」につくる。
- 165 黄帝が夢で見た無為自然の国のこと（『列子』黄帝より），転じて昼寝をいう。
- 166 張養浩（1269-1329），字は希孟。済南（山東省）のひと。
- 167 李致遠（正卒年不詳），名は深，致遠は号，溧陽（江蘇省）のひと。
- 168 上海商務印書館，1929年排印本。
- 169 獣名。狸々ともいう。
- 170 晋・葛洪輯，清・劉克任校注『西京雜記校注』（上海古籍出版社，1991年）。
- 171 『欽定四庫全書』第885冊。
- 172 韓子蒼（1080-1135），宋のひと，本名は韓駒。子蒼は字。陵陽仙井（四川省）のひと。
- 173 『全宋詩』は「午鵲」につくる。
- 174 王拳之（1290-1350?），杭州のひと。
- 175 1162年ごろのひと。字は夢弼。呉郡（蘇州）のひと。
- 176 美人の手のたとえ。
- 177 石正倫，号は瑤林。

- 178 王義山 (生卒年不詳), 字は元高, 富州 (広西省) のひと。
- 179 文学古籍刊行社, 1955年。
- 180 元・高則誠「新刊元本蔡伯喈琵琶記」二卷 (『統修四庫全書』第1774冊所収)。
- 181 『四部叢刊』初編所収。
- 182 巴蜀書社, 1989年排印本。
- 183 「校注劉知遠諸宮調」 (『東北大学文学部研究年報』第14号 1964年), あるいは波多野太郎編『中国語文資料彙刊』第2篇第1巻 (不二出版, 1992年) に所収。
- 184 晋の石崇の園。ここで詩会を開き, 詩ができないものには罰として酒三斗を飲ませたという故事がある。
- 185 王得臣 (1036-1116), 字は彦輔。安州安陸 (湖北省) のひと。
- 186 『欽定四庫全書』第862冊所収。
- 187 李文尉 (生卒年未詳), 真定 (河北省正定) のひと。
- 188 お世辞を言うこと。
- 189 煬帝 (569-618), 隋の二代皇帝, 本名は楊広。在位は604～618。
- 190 盧肇 (818-?), 字は子発, 宜春県文標郷 (江西省) のひと。
- 191 杜荀鶴 (846-904), 字は彦之, 池州石台 (安徽省) のひと。
- 192 貫休 (832-912), 字は德隱, 俗姓は姜氏、蘭溪 (浙江省) のひと。
- 193 元好問 (1190-1257), 金のひと, 字は裕之, 太原 (山西省) のひと。
- 194 『惜香樂府』は「攤破醜奴兒・冬日有感」につくる。
- 195 四庫全書本は巻10「論新及第友人」につくる。
- 196 四庫全書本は巻15につくる。
- 197 原書は巻3につくる。
- 198 同上。
- 199 皮日休 (838-883), 字は襲美, 襄陽 (湖北省襄陽市) のひと。
- 200 『全宋词』は「慶韓南澗尚書」に作る。
- 201 李寿卿 (生卒年不詳), 太原 (山西省) のひと。
- 202 簫德祥, 名は天瑞, 德祥は字。
- 203 『統修四庫全書』第1740冊所収。
- 204 劉庭信, 先名は廷玉、益都 (山東省) のひと。
- 205 『南史』沈約伝に, 沈約が重用されなかった時, やせ衰えて腰帯が短くなったとある。
- 206 『四部叢刊』初編所収。
- 207 呉小逸 (生卒年不詳), 貫雲石 (1286-1324) と同時代のひと。
- 208 周仲彬 (?-1334), 名は周文質, 仲彬は字、建德 (浙江省建德県) のひと。
- 209 陳允平 (生卒年不詳), 字は君衡, 四明 (浙江省寧波) のひと。
- 210 張先 (990-1078), 字は子野, 湖州烏程 (浙江省湖州吳興) のひと。
- 211 村の小役人の意味。
- 212 花の蕊と柳の芽のこと。
- 213 愛憎を含む親しみをいう。
- 214 謝朓 (464-499), 南朝齊のひと, 字は玄暉, 陳郡陽夏 (河南省) のひと。
- 215 盛んな様子。
- 216 李嘉祐 (生卒年不詳), 字は從一, 趙州 (河北省趙県) のひと。
- 217 もとどりを結わえること。
- 218 顔を赤く塗って化粧すること。
- 219 牛嶠 (生卒年不詳), 字は鬆脚, 隴西のひと。
- 220 泣いて眉をひそめること。
- 221 江淹 (444-505), 南朝梁のひと, 字は文通, 濟陽郡考城県 (河南省蘭考県) のひと。
- 222 孟浩然 (689-740), 襄陽 (湖北省襄陽市) のひと。

- 223 『孟浩然集』『全唐詩』は「分飛」につくる。
- 224 李賀（791-817），字は長吉，昌谷（河南省）のひと。
- 225 姚合（775-855），峽石（河南省）のひと。
- 226 挫傷すること。
- 227 黄庭堅（1045-1105），宋のひと，字は魯直，洪州分寧（江西省修水県）のひと。
- 228 宋之問（656？-712？），字は延清，一名に少連，號州弘農（河南省靈宝県）のひと。
- 229 『宋之問集』は「答李司戸」に作る。
- 230 戎昱（744-800），荊州（湖北省江陵）のひと。
- 231 『戎昱詩集』は「花裏色」につくる。
- 232 張籍（766？-830？），字は文昌，呉郡（蘇州）のひと。
- 233 一族の生活のこと。
- 234 陸龜蒙（？-881），字は魯望，蘇州呉県（蘇州市）のひと。
- 235 郷土の料理の名から転じて故郷を懐かしむこと。『晋書』張翰伝による。
- 236 空海著『定本弘法大師全集 第6巻』（高野山密教文化研究所，1997年）所収。
- 237 「貴，戦国策，貴合於秦以伐齊，注云，貴，猶欲也」とある。
- 238 王建（？-830），字は仲初，潁川（河南省許昌）のひと。
- 239 『王建詩集』は「慣舞」につくる。